シンガポール日本人学校　クレメンティ校での3年間

── 日本人学校の特色と教頭の業務 ──

前シンガポール日本人学校クレメンティ校　教頭
福島県田村郡三春町立岩江小学校　教頭　池　上　　雅

キーワード：学校経営，教頭の業務，安全対策

１．はじめに

赤道直下の常夏の国，シンガポール。日本の淡路島程度の大きさの島国で，人口は約440万人である。そのうち華人と言われる中国系住民が76%，マレー系は14%，インド系が８％と多民族国家である。日本人は，約２万５千人の長期滞在者が暮らしている。公用語は，英語，北京語，マレー語，タミール語となっているが，バスや地下鉄の中で聞こえてくるのは，福建語や広東語がほとんどである。歴史は40年余りという若い国である。

シンガポール日本人学校は，シンガポール建国翌年の1966年に設立され，2006年には創立40周年を迎えた。1996年度には，小学部だけで2200人を越える児童が学んでいたこともある大規模校である。現クレメンティ校校舎は，４度目の移転で，1976年に落成した。

シンガポール日本人学校は，チャンギ校とクレメンティ校の小学部２校，中学部１校の３校体制で運営されており，約1700人の児童・生徒が学んでいる。小学部は学区制を敷いているため，住居により学校が決定される。３つのキャンパスからなる日本人学校は，世界でもシンガポールだけである。

クレメンティ校は，シンガポールの西よりの地域に位置し，正門前にはシンガポール大学の校舎が見え，学校の裏にはクレメンティ・ウッドの緑が広がり落ち着いた環境にある。キャンパスには，マンゴー，パパイヤ，ライム，ジャックフルーツ，バナナが実っており，午前中は欄干を走り回る子リスを見ることもできる。

現校舎は，2005年にのリノベーションを済ませ，ランと海の色をイメージしたえんじ色と水色を基調とした校舎に生まれ変わっている。

特色ある教育活動等については，ホームページでも紹介されているので，ここでは国内の学校と異なる日本人学校ならではの特徴や教頭の業務の一端について記述したい。

２．日本人学校の特色

(1) 急激な児童数の増加・頻繁な児童の編入学・退学

2004年度にクレメンティ校地租借延長が認可され，本校存続が決定されて以降，校区の変更もあり，急激に児童数が増加していた。赴任した2005年度には329名の児童でスタートしたが，2008年度には635名となり，３年間で300人以上の増加で，約2倍に膨れあがった。

クレメンティ校の児童数の推移　　（児童数はいずれも入学式当日の数）

年	2005	2006	2007	2008
児童数（人）	329	447	511	635
学級数	13	15	18	23

本校では，ウェイティング制度を取り入れていないため，2005年度には，１クラスが41名になってしまった学年

があった。児童の急激な増加に対応するため，現地や日本国内から日本人教員や財団職員を採用することは急務であったため，本校ホームページや現地の日系新聞に広告を掲載し，職員を募集した。面接においては，事務局長，校長とともにて面接を担当することができ，いい経験をさせていただいた。

また，3年前後で帰国あるいは他の国へ転学していく児童が多い日本人学校ではあるが，私が赴任していた期間は，入学児童を含めると，毎年200名前後の児童が入れ替わるという変化の大きな時期であった。

(2) 安全対策

シンガポールは，アジアで一番過ごし易い「安全で清潔な国」と言われ，治安面に関しては，日本よりも安全と実感できる国である。しかし，海外でもあり，気を抜くことはできないので，安全面に関しては，次のような体制をとっている。

① 校地内

校地内の安全対策については，敷地をフェンスで囲った上でセキュリティ・ガード（警備員）が24時間配置されている。出入り口である校門では，警備員が来校者の確認を行っている。保護者は予め学校側から配付された“Parents Pass”を提示することになっている。来校者には警備員が身分証明書と交換に“Visitor Pass”を配付して着用させ，不審者の侵入防止と児童の安全確保に努めている。

更に2007年度には，17台の監視カメラが配備され，警備室及び職員室にてモニター監視を行うなど，安全対策の強化を図っている。

② 校外学習時

校外学習においては，事前に教職員が見学場所の下見を実施するのは勿論であるが，当日は保護者の方々にボランティアを依頼し，グループ学習の円滑な実施とともに安全面の確保を図っている。幸いにも保護者はたいへん協力的で，半数以上の方々から協力を申し出ていただいている。

③ 登下校時

登下校は，児童のほとんどがスクールバスによる。バスの中では，日本語が通じない現地の運転手とアンティと呼ばれる添乗員だけの時間帯となる。そのため，当たり前のことではあるが運転手には携帯電話を持たせている。各コンドミニアム前までは，保護者が送迎することになっている。下校時には迎えがないために学校へ送り届けられる児童が稀におり，保護者が迎えに来ることもある。暑さのためかバスの故障が時折あるため，バス運行中は予備のバスが校地にて待機している。

また，スクールバス事故発生時の緊急対策訓練もバス協同組合と連携して実施し，「緊急時対応マニュアル」の見直しを図るとともに緊急事態に備えている。バス協同組合とは，バス利用者（保護者）の互助組織であり，バス会社との交渉も協同組合バスの車内でもトラブルも，利用者から選出されたバス委員長を中心としてバス委員で処理している。

(3) 保護者の積極的な協力

保護者の子どもの教育に対する関心は国内以上に高いと同時に，教育活動に対しては保護者は非常に協力的であった。校外学習への協力については安全対策のところですでに述べたが，1学級平均年5～6回の読み聞かせも学級数が多いためかなりの回数になるが，多くの図書ボランティア方々が熱心に協力してくれた。また，新刊図書のコンピュータへのデータ入力を始め，ブッカーかけや日本の季節に応じた掲示物の作成など，本校の2つの図書室は，図書ボランティアにより管理されていたと言っても過言ではない。

PTA活動もとても活発であった。活動は全てPTAの方々により運営されており，文書の作成から印刷・配付まで自分たちの手で行われていた。役員が毎年総入れ替えするにもかかわらず，円滑に運営がなされており，整理され

たファイリングや緻密な事務引き継ぎには，教員側も見習わなければならないと感心させられた。

教頭としての私は，PTAの副会長として役員準備会や役員会に積極的に参加し，保護者の生の声を吸い上げると共に学校の方針を理解して協力いただけるよう働きかけた。

(4) 著名人の来校

日本国内であれば，望んでもなかなか来ていただけない方々においでいただいたり，2006年度には「日本庭園」をご訪問された天皇皇后両陛下を，ご奉迎する機会を児童は持つことができた。

また，シンガポールのプロサッカーリーグ（Sリーグ）のチームの１つであるであるアルビレックスの日本人選手には，クラブ活動や体育の授業で定期的にサッカーを指導をしてもらうことができた。

【来校された方々】

腹話術士のいっこく堂さん，落語家の桂三枝さん，漫画家のいわみせいじさん

エッセイストの永六輔さん（チャンギ校への来校であったが，５・６年児童が講演会に参加）

金沢在住の紙芝居おじさん「のまりん」

３．教頭の業務

(1) 大規模改修工事（赴任１年目）

2004年度に本校存続が決定されていたため，赴任したときには築30年になる校舎のリノベーションが進められることになっていた。そのため，赴任１年目は業者との交渉や現場監督者との打合せに格闘することが多かった。赴任早々校舎内外壁面の塗装のために現場監督者と打合せをすることが多かったが，独特の訛りのあるシングリッシュ（Singlish）には翻弄されることがしばらく続いた。

それに加え，図書室・職員室・トイレ・屋根の改修工事，遊具の設置工事，電話機・電話交換機の交換等，目白押しだった。図書室の改修工事においては，全てを任せていただいたため，業者を選定するところから始めた。各種のプランや見積もりを比較検討するのは業務上初めての経験であり，苦労することもあったが，工事が完成したときの喜びは大きかった。

また，この業務を通して，金銭面における経営感覚が多少なりとも身に付いたように思われる。

(2) 40周年記念事業（赴任２年目）

2006年には，創立40周年を迎えたシンガポール日本人学校の記念事業が行われた。３校体制あるため各校で事業を分担したが，クレメンティ校では，記念誌及び記念品を担当した。資料の収集に当たっては適切な資料（写真）が見つからないことも多かったため，他２校を回り，資料を見つけ出すこともあった。旧職員の原稿募集に際しては，依頼する旧職員をどう選定し，その方々の連絡先をどう見つけ，どう連絡を取っていいのか途方に暮れていたが，日本で「シンガポール日本人学校OB懇親会」が開催されるという話を耳にしたので，日本シンガポール協会に連絡をとったところ，旧職員の原稿募集の広報を快諾していただき，胸をなで下ろすことができた。

本来すべき業務に加えての作業であったので，思い通りに進まず，たいへんな思いをすることも少なからずあったが，過去の資料を整理しながら読み返していくことにより，40年という長い間，日本人学校を支えてきた先輩方の熱い思いを感じることでき，その歴史の重みをひしひしと感じることができた。40年という節目の年に勤務することができたことに感謝したい。

(3) 学校予算の管理

日本の公立学校では，一般的には事務職員が行っているため，教頭では経験することのない業務である。現地採用教員等の給与等については事務局が行い，教頭は，教育活動に関わる予算の編成・執行・管理を担当する。予算編成にあたっては，各主任からの予算要望を精査して取りまとめ，事務局長と折衝する。3校体制であるため各校間のバランスが大切で，事前に教頭間で調整を図る。

この業務を通して，20数年以上勤めた公立の感覚から脱するのには時間がかかったが，授業料収入により学校が運営されているという私立学校的な発想や判断ができるようになったと実感している。

(4) 校舎管理

校舎管理のかかわる業務の推進にあたっては，事務局長を初めとした事務局職員，清掃員，技能員，警備員のサポートが欠かせない。また現地業者との様々な交渉には，教頭・校務主任だけでは知識・経験・情報が不足しているので事務局職員からの助言と，日常的な交流による情報交換が学校運営上欠かせない業務の一つである。

そのため，これら現地採用職員との信頼関係作りが教頭・校務主任にとってとても重要である。彼らは，中国系，マレー系，インド系と様々であり宗教もそれぞれ異なるため，食事などにおいてはそれらを十分に考慮した対応が必要であった。

(5) その他

① デング熱（denguefever）対策

デング熱はデング熱を媒介する蚊（ネッタイシマカ，ヒトスジシマカ）に刺されることにより発病するため，校地内では，ボウフラを発生させないよう十分に気を付けなければならない。ボウフラは，側溝などに水が溜まっていたり，植木鉢の受け皿に水が溜まっていたりすることによって発生するので，そうならないように職員は毎週点検を行っている。それに加え，業者には毎週1回のペストコントロール（Pestcontrol）を依頼している。これは，長いノズルの先からもくもくと煙を出しながら薬剤をを噴霧するものである。校舎内外は，霧が覆ったようで3m先も見えない状態になり，これには赴任したばかりの職員は一様に衝撃を受けるようである。また教頭は，業者とともに定期的に校舎内外を巡回し，ボウフラ発生防止のための対応策を協議する。

このような対策をとっていても，本校ではホウフラを発生させてしまい，3年間で2度ほど罰金を課せられた。

② ヘイズ（Haze）対策

ヘイズとは，インドネシア・スマトラ島での焼畑農業や森林火災による煙が風に乗ってシンガポールやマレーシアに流れてきて引き起こされる大気汚染である。赴任2年目の2006年度は，シンガポール国内のヘイズの状況が悪化しており，外は薄い霧がかかったような状態が続く時期があった。そのため，一時閉鎖されたシンガポールの学校もあった。ヘイズの状況が良くないときには，校庭での運動や遊びを禁止しなければならないため，その時期は，毎朝ヘイズ指数を確認し，職員に周知していた。

4．おわりに

自分なりに3年間を総括すると，保護者並びに現地採用職員との信頼関係を築くことができたのが大きな成果であると実感している。そしてそれがクレメンティ校の円滑な教育活動の基盤に繋がったと信じたい。教頭の業務を通しての保護者の方々や現地採用職員とのかかわりは，教頭の業務の中で最も楽しいものであり，素晴らしい偶然の出会いの一時を持つことができた。

クレメンティ校での3年間をサポートしてくれたシンガポール日本人学校3校の校長先生方を始め，教頭仲間，国際交流ダイレクター，事務局職員，それに温かく接していくれた多くの保護者の方々・児童に感謝したい。